



Title	北海道の空家具とその貼方
Author(s)	青柳, 惣次
Citation	學藝 : 北海道學藝大學機關誌, 2(1): 54-58
Issue Date	1950-08
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3478">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3478</a>
Rights	

言つていゝ描線があるのである。それは馬の前胸、及び頭部と首部との接合点にそれはそのまま用いられているのである。これは修得と言うことからばかりではないのである。なぜならば印象派以後の描法では、とうていこんな味わいの線は出ないからである。然かも20世紀の画家が好んで修得し、また修得しようとしたものからは生れ出でこない描線なのである。それは20世紀のアスファルトの上におかれた石器のやじりなのである。このことは異質な描写技術が彼の遺傳の中に流れていて、病的にまで新しい形式、新しい図形への意欲がそのよりどころを見出して出来上つたものだと言えるのである。また1932年代の作品である素描「ギャラの顔の偏執狂的變形」の中には、モチーフは、スプーンであり、金属のピンであり、懐中時計であり、現代の女のちぢれ毛のブローヤイルであるのであるが、それを表現する描線は、こくめであり、印象派以前の描線である。そしてこう言つた一種の彼の血液に流れこんでいる古さへの反抗が、彼をかりたてゝ「絵画的な領域に於ける僕の野心は、すべて具体的な非合理性の影像を、最も熾烈厳格な精密さで表出することにある」と言わしめ、偏執狂的批判的タブロウを生ましているのである。「最も熾烈厳格な精密さ」と言ふ文字の中には彼のとりのぞくことの出来ない休臭を合理化しようとする意図を汲みとることが出来るのである。

たしかに、サルアドル・ダリの作品は驚異的作品ではあつた。だが根深い傳統をもちその上に立てられた近代絵画の歐洲では育たなかつたのである。1931年に発表さ

れた「記憶の固執」は、アメリカ大陸に於てこそ非合理性の影像として拍手をあげたのであつた。一個の細々とした木の枝に、だらりと二つにまがつてぶらさがる懐中時計、熱氣のためにとろりと軟化した餡の懐中時計達、しかも澄明なその彩色法には驚ろき目を見はる要素は充分あるのであるが、私はその中にひそむ不健康な透明の瓦斯体を肯定するわけにはいかないのである。この中から未來の絵画が展開するであろう要素を全的に肯定するわけにはいかないのである。

狂人や、特異兒童の作品は決して藝術にはなり得ないのである。サルアドル・ダリは大人の特異兒童だ、それもすぐれた頭脳と驚ろくべき描写技術をもつた狂人の大人の兒童だ。それを意味づける「超現実主義」を私は否定する。

終りに「読賣」が発表したマチス訪問記の中からマチスの言葉を採録して結末をつけなければならない。

——インスピレーションの品質を決定するのは題材でなくその人間なのだ。——とそして藝術の必要は我々人間が、「人生に耐え得るように彼等を助けることが問題なのである。」と、私はマチスのこの言葉の中に絵画への傳統を推うものである。

(参照書籍)

1. 滝口修造「ダリ」アトリエ社、昭和14.1.10.
2. 安部公房「シュールリアリズム批判」みづゑ8月号1949.8.
3. 「セザンヌ以後」別冊アトリエ第二集 1.20.アルス
4. ライフ 12:19 1949.

## 北海道の杔家具とその貼方

青 柳 惣 次

旭川分校工作研究室

Sōji Aoyagi: Grain Patterned Furniture in Hokkaido and Its Gluing Method

### 目 次

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1. 杔 貼 家 具  | 5. 杔の着色目止 |
| 2. 北海道と杔貼家具 | 6. 杔の塗装   |
| 3. 杔の種類     | 7. 杔の將來   |
| 4. 杔の貼方     |           |

#### 1. 杔 販 家 具

現在の家具は機能的にみても、又色彩、技法に於ても

科学的工業的になつてゐる。これは産業革命後当然のことゝされ、手工技法による工藝的な方面は世の工業技術家達には殆ど省みられなくなつた感がある。然しこれは

時としては永い習慣又はその國民性等からみた場合、何かしら物足りなさを感じさせるものがある。例えば戦後盛んに金属漆器が作られるが、之についてやはり幾分木地の跡も見えし、刷毛の跡等もある方が何となく味もあり、落付きを見せてくれる。家具についても—これはワイリアム・モリスの「アーツ・エンド・クラフツ」的な考え方に逆戻りする様であるが—これから述べようとする歪貼家具はどうしてもクラフトによらねばならずそこに又筆者の趣味嗜好と合致するものを見出すのである。

2. 北海道と歪貼家具

之れを北海道にみれば、家具は本州の如く所謂「サビ」のあるものは少ないが、やはり北海道らしい味が現はれてゐると思う。家具の大部分が歪貼家具であると言っても過言でない程多くの道民に歪が愛され親しまれてゐる様である。之れは檜が北海道の特産であり、その歪目の多いところに原因がある様に思はれる。近代になつて本州より種々の歪が移入され、又それが「内地物は優秀なり」との道民の先入感から珍重される向もある。然し一般に粗朴な性格を持つ一般道民には檜の輪状歪の方が、ぴつたりしてゐるではなからうか。北海道の家屋も家具も一般に粗野である。然し大抵の家には本州では見られない様な歪貼家具（主として茶棚、簞笥等）があるのに驚く。之れは粗末な劃一的な家屋に、一つの光を與えるものである。道民として之が研究發達を図ることは、その生活に趣味と明朗さを與えるものと思う。歪貼に用いる膠は動物性であり、耐水性がなく、我國の様な濕氣の多い所では破損し易いが、北海道の如く概して濕氣の少ない所では、歪貼家具の多いのも理由の一つとして挙げられると思う。

3. 歪 の 種 類

歪は年輪、髓線、繊維の扭、歪及色素の不規則なる滲潤によつて生ずる模様で、之れが挽き方により板目、柱目となり、カーブに削つた時に美麗なる歪目を現はす。之れを人為的に木理、歪目を模倣して画く場合もあり、又木材に型を圧して木理を現はしたり、刀を以て導孔を横作する法、ローラーによつて歪をそのままの材に轉写する法等色々行はれてゐるが、之等はやはり自然の銘木を愛好する國民性からみてあまり感心出來ない。次に歪の種類、性状を挙げれば—

① リボン状歪理 (Ribbon grain)

逆目のある材で、之れは鉋削困難であるが適当に鉋削すれば光線の反射を異にし、恰もリボン状を呈する。(ゴム、楡、鈴懸、マホガニー)

② 波状歪理 (Wavy grain)

材を柱目に割裂すれば、表面波状を呈するもの故柱目に鋸断すれば、波状歪理を現はす(楓、樺、櫟、栲)

之れは根株の樹幹に接する部分、或は大なる枝條の下部等繊維の皺状を呈する部分に起るもので、市販のものは之れも縮歪として販賣してゐる。

③ 瘤状歪理 (Blister grain)

年輪に多数の不規則なる瘤状隆起により起るもので、板目状にて顯著である。【桧、櫟、楓、ユリノキ、マホガニー、南部松、黄松(アメリカ)】ベニヤには(合板)大きいがこの歪が現れてゐる場合がある。

④ 縮歪理 (Curly grain)

繊維の不規則なる歪みを呈するもの。(櫟、朽、楓)

⑤ 鳥眼歪理 (Bird's-eye grain)

年輪の局部的に強く圧迫されて起る。(楓、イタヤ、等の板目又は廻轉鉋削により見られる)

⑥ 銀理 (Silver grain)

射出隨で髓線の片輪状をなせるもので、柱目に於て認められる。(楡、櫟、鈴懸)

⑦ 類

昆虫或は人為的に刺戟されて、多数の休眠せる芽の局部的發達により生長せるものである。(黒トネリコ、櫻、楓、胡桃、レッドウッド、ケンボナン、イタヤ)

之等の歪目は一様でなく、千差万別に生長してゐるところところ歪の面白味があり、工匠は之等を如鱗歪、牡丹歪、葡萄歪、縮細歪、鶉歪等名付けて珍重してゐる。北海道に多く見られるのは櫟の歪であるが、之れは波状歪理、瘤状歪、縮歪等の歪で、その鉋削の形によつて、種々に變化してみられる。次に木製品指定地としての旭川市に於ける市販(一條通十九丁目川島突歪店)の歪の種類を挙げると

種類	主産地	備 考
櫟 歪	北海道	櫟の瘤状歪  類  一部内地櫟あり
櫟縮歪	同上	
櫟柱歪	同上	
朽 歪	岐阜、福島	
朽縮歪	同上	
櫻 歪	新潟、福島	
櫻柱歪	同上	
桐柱歪	山形、福島	
楓 歪	長野	
ケンボナン	同上	
樺 歪	台湾	
樺柱目	同上	
桑 歪	三宅島	

種類	主産地	備考
黒柿	福島、仙台、山形	縞杢、鶉杢、蛇腹杢、板目杢等あり
チーク杢	印度	
ピンカラー	同上	心材赤く辺材白い
楓神代染	北海道、長野	鳥眼杢
タマクロ	南洋	樟材に似てゐるが少し黒味の縞あり
ピラン	南洋、三宅島	赤く樟杢に似てゐる
桧杢	北海道	瘤状杢
楠杢	同上	銀理
赤楠の類	同上	楡

#### 4. 杢の貼方

##### ① 膠

杢貼には先づその接着剤である膠を選定する要がある。膠には耐水的なもの、然らざるものとあり、前者はカゼインを主原料として、之れに消石灰を混じたカゼイン膠で、之れは普通行はれる杢貼には適せず、一耗以上の薄板をプレスにより貼付けるに用い、苛性ソーダを混和し用いる。尙之れに漱ノ漆を少し入れると接合を有効ならしめる。後者は普通膠で、和膠、洋膠、液状膠の別がある。その種類も多いが概して上質のものを選定する要がある。気温湿度の程度により乾燥の早い時は多少中質のものを混じて使用するが、貼付後の耐久力からみる時は上質の洋膠がよい。洋膠は電気乾燥故湿度に対する力が強い様である。一般に良質なるものは、(A)色扱は硝子の光輝ある蒼色又は濃茶で斑点ないもの。(B)透明なるもの、黒色になるに随つて悪い。然し漂泊したものは時として固着力を失う原因となることあり注意を要す、(C)良く乾燥してゐるもの、空気中の濕氣に感じ易いのはあまりよくない。適度の脆性あるものよく、硝子の様に脆性あるものは杢貼には適しない。(D)冷水に数時間入れ、之れを取出して重量を計つてみて水を吸収して重くなつてゐるものはよいが、逆に水に溶解して軽くなつてゐるものは粘着力もなく不可である。(E)臭氣も上等のもの程少ない。以上の如くして膠を選定したならば、厚布にて包み、小さな碎片を作り之れに水(蒸溜水なら最もよい)を入れ四、五時間放置して充分水分を吸収させ、然る後膠鍋に入れて二、三時間湯煮をなす。火に直接かけたものは杢貼には絶対禁物である。溶解したならば刷毛で滴る有様をみると、縋いて容易に流れる位の濃度がよく、温度は華氏九十度位にして使用する。何回も使用し臭氣を発生するもの、カビの生えたもの、木屑の入つたもの等使用してはならぬ。

##### ② 刷毛

刷毛は巾三種以上の毛の強い、剛い、又抜けないものを選びねばならぬ。普通膠には藤の茎を繊維の弛むまで槌で叩いて使用するが、杢貼には適しない。

##### ③ 杢の貼方

杢貼は温室内(華氏六七十度)で行うのが理想的であるが、温室のない場合は塵のない、温い部屋で行う。先づ心木に前記程度の膠を、むらのない様に塗布する。心木を温めて塗ると平均に塗ることが出来る。廣い面の場合には膠塗機を(ロール)使用する、杢は予め温湯にて濡らして、必要量に切り(余裕をつけて)水分を少しく含んでゐる時に(このコツを会得することが肝要であるが大體濡らした布で杢の両面を拭く程度)之を心木に当てる。この際杢又は膠の面に鋸屑様のものが入らぬ様注意しなければならない。杢に水分不足の時は杢が後に浮き、逆に水分の多い時は貼つた後に割裂する。之等は杢の種類にもよつて異なる。次に湯呑様のものを中心より過剰の膠を圧出す。同時に氣泡を抜き去り、杢を心木に充分接着せしめねばならぬ。杢の厚さが0.3耗-0.4耗位まではよいが、0.5耗以上の厚杢は膠を少し凝固せしめてから、焼鑊を温めて之れに当て膠を溶解しつゝ外側に圧出せしめる方が効果的である。湯呑、掌等で数度摩擦してよく接着せしめる。鑊を熱し過ぎる時は、その部分の膠が表面に出、又は鑊に焼付き杢が鑊と共に剝取られることあり、又は接着に必要な膠が表面に喰出し、その部分が浮いてしまうことがある。杢の端の割裂した場合は、糊で和紙又は布を裏貼して、之れを表にして貼り後に紙を剝ぎ去る。接着に必要な膠が局部的に不足で杢の浮く場合は、温湯で杢を濡らし、温き鑊を当てる。熱した鑊を上から当て、膠を白く焼いて接着させる法もある(之れは樺細工-櫻の皮細工の際貼りつける法であるが杢は伸縮が甚だしい故杢貼には適しない)又杢を曳合せる場合は大體の形に切り、曳合部分を重ねて心木に乗せ、曳合部分を残して他の部分を貼付け、曳合部を鋭利な刃物で両方一緒に切り、鑊を当て、膠を溶かし掌で圧して貼付ける。薄い杢の場合は片方の曳合部をよく浚えて貼付け、一方の端をそれに重ねて貼付け、後にサンドペーパーで平にする場合もある。寄貼り等は予め心木に図案を画いて貼付けてゆくとよい。

尙注意すべき事項を挙げれば、①膠は平等に必要量塗ること。②心木には穴があつたり、釘の頭が出てゐることは禁物である。③膠は杢につけず必ず心木につける。④杢は水に浸したら平等に乾燥させなければならぬ。⑤心木は杢貼後反張しない程度の厚さをもち、出来れば杢と同種の木材がよい。⑥白色の杢には晒膠か、普通の

膠にフレークホワイトを混入使用する。④心木の表面及柁に塵埃又は脂肪等附着しない様特に松の如く油氣の多い木材には接着力が弱い。⑤梅雨期、寒冷期等柁貼には適しないが、ホルマリン溶液を用いて乾燥を早めるとか、室内の保温を必要とする。⑥心木は特に平滑に鉋削する。以上の注意事項に随つて柁を貼り終えたら、8~12時間後更に刷毛又は布で水を塗り、完全に接着してあるか否かを検査すると同時に、木地の打込められた部分を正常に戻す。表面の光により貼れない部分は判るが、尙掌、指、爪等で検査すると音で判る故その部分を濡布で拭き、温めた饅を当てゝ貼付ける。次に鉋をかけるが、裏金をよく効かせてかけないと貼つた柁を剝取ることになる故特に技術を要する。鉋又は皮細工用の包丁を直角に立てゝ平滑にしてもよい。双物の効かない部分はサンドペーパーによる外はない。

### 5. 柁の着色、目止

目止料を柁目に充填し、平滑な面を作ると共に、尙一層鮮明なる柁目を現す爲めに行はれるもので、最初酒精ニスに2~3回塗り木理の凸部が着色しない様にするか、場合により全体を着色し、凹部に異つた色の目止をなす場合もある。柁の着色目止は普通木材と同様に主として砥の粉を用い、之に染料又は顔料を入れて目止料を作るが、陶石を目止に使用する時は、乾燥後体積が減らず平滑な面が得られる。同一の着色剤を用いても柁の材質により一様には言い得ない。柁貼家具に最も多く使用されるものは、褐色及透明、黒等である故次に之を記せば、○褐色目止料、砥の粉（石英の粉末、白堊、陶土、滑石、大理石粉等も用いる）に茶粉類を混じて用いる。紅柄に種々の顔料を入れたものでも割に明るい柁目が現はれる。先づ剛毛の刷毛にて木孔に充分充填せしめる氣持で塗付け、後布片で拭い去るが、充填した目止料を拭い去らぬ様柁目に直角に拭い、余分を更に柁目に圧入する様に拭くことが肝要である。目止料には膠を5~10%入れて作るが、砥の粉に乾性油かワニス類を25%~30%混和して作る場合もある。○透明目止は木地の色を淡色透明にする時に用い、胡粉、石膏、白堊又は木地により砥の粉を前記同様に用いる。尙黒粉にて全体を黒くし、柁目を白く出す場合は亜鉛華又は白ワニスを摺り込む。銀理はこの法によるのがよくその持味を現はす。○黒色目止料は砥の粉の中に油煙、又は黒粉を混和する。又は黒ワニスに砥の粉を入れて煉り合せ、テレメン油にて適当に稀釈して用いる。着色目止が終れば充分乾燥後アルコールにて拭く時は最初に塗つたニスが溶解平均化されると同時に目止料の余分を拭き去ることが出来る。

### 6. 柁の塗装

塗装は普通の塗装と大差ないが、柁の持味を生かす爲めに或程度限定され、透明又はそれに近い塗装による外は殆ど行われぬ。二三の例を示せば、①酒精性ニスによる場合は茶糊筆筍等水、熱を用いないものに多く使用され、柁貼家具の大部分が之れによる。現在北海道で行われてゐるのは速乾ニスが最も多く使用され、従來のラツカーニス又は人造ロジンに比し、刷毛塗可能で、殆ど無色のものあり、展撻性に富み、價格も割に低廉であり、乾燥早く優れてゐる点が多い。種類も質も製造会社により異なるが、使用法は濕氣のない天候を選び（塗装室があればよい）塵埃のない部屋にて行ふ。一回毎に乾燥後サンドペーパーをかけて塗りを重ねることは普通の塗装と何等變らない。2~3回塗つた後、耐水ペーパーにて研磨し塗面を平滑になす。次に水分のよく乾きたる後、タボ塗りをなす。又は50%位の薄めた塗料を刷毛にて薄く塗る時は艶のある塗面が得られる。尙之れをエアブラシュによつても出来るが、之れには乾燥の早いラツカー性のニスを用いる。

②ラツカーは硝化綿塗料で刷毛塗用のものもあり又速乾ニスにもラツカー性のものもある故薄める場合シンナーを異にする故注意を要する。薄めたものを回数多く塗る方が塗面が平滑に出来る。③油性ニス、前記塗料は熱に弱く食卓唐机の類には適せず随つてこの場合は油性ニス又は尿素系の塗料等を用いねばならぬ。擦漆によるのが最もよいが、高價につく点、多少着色するのを欠点とする。之れは生漆又は濃メ漆を綿又は柔軟なる布片につけて器物の表面を摩擦し、塵埃のかゝらぬ場所に置いて乾燥せしめる。漆の乾燥は濕氣を必要とすることは言ひまでもない。ライト漆、三井漆等筆者は未だ試験してゐない。油性ニス、ラツカー等の場合は乾燥した上を〇〇〇番又は〇〇〇〇番のステールワール（鋼毛）を束ねて、ペースト状の蠟（コンバウント）をたつぷりつけて、前後に撫で、そのあとを布でよくみがく。尙ラツカーの艶出にはアクセライト等ある。尿素塗料にはアルカリ性の下塗は禁物である。

### 7. 柁の将来

柁貼家具は数少い銘木を有効に使用する点、又安價な材を價値づけ美麗な調度品を作れる点からも意味があり、吾國の國民性に、明朗さと、希望を與えるものであることを信ずる。吾々は古來日本家具の意匠技術をこの大きな變動期に際して、決して見捨てゝはならない。只之れが工業的生産に適せず専らクラフトによらねばなら

ぬ点及その量感に於ける欠点は大いに反省を要すると思われる。学校等に於ける教材としては、手工業的な貼方の技術を修練すると同時に、銘木についての知識を興え、精密にして明瞭な國民性を養うことが出来ると思う。

この稿を書くに当り、適當なる参考書見当らず、貧弱なる研究、実験をも省みず発表することは汗顔の至りであるが、技術上其他に誤り訂正を要する個所が多いと思

われるので、諸賢の御指導をお願いする次第である。

主な文献

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| ○有用木材の性質及用途      | 田中勝吉著     |
| ○木材ニカッ貼ソクイ貼実施法   | 米田文治著     |
| ○塗料及塗装法          | 清水正雄著     |
| ○塗物術             | 岡山秀吉著     |
| ○木材の加工及仕上        | 木槽恕一著     |
| ○Popular Science | 工作篇 1949年 |

## 学藝第一卷第一号所載「古代地名 傳説の考察」に対する補註

阿 部 源 藏

釧路分校國語國文学研究室

Genzo Abe: Supplementary Explanation to "A Consideration on the Ancient Tradition of Geographical Names" in the Gakugei, Vol. 1, No. 1.

1. 一例をあげれば:

鶴つるはつらなるなり、おほくつらなりとぶ鳥なり。雁もつらなりとべども次第にさがる。つるはすぐにつらなるなり。云々(日本釈名 中 益軒全集 卷一 p. 48)

2. 一例をあげれば:

獸けもの毛生ひて、四つの肢あれば毛肢物といふべきを略せるか、(田珠庵雜記 契沖全集 卷八 p. 150)

3. つい最近まで日本の國体を論ずるもの、一度口を開けば祭政の一致を説かざるはなかつた。しかし、「一致」という概念は、本来相異なる二つ又はそれ以上のものが、たまたま同一の状態にある場合をいうのであつて、従つて「祭政一致」は祭祀と政治とを別個のものとして概念し、その前提に立つての用語法であることは明かである。この二つのもの一致の上に生活の理念を見出そうとするが如きは、古代にあつては企て及ぶべくもなかつた。今日の政治学的常識をしらずしらずの間に、古代生活に移入しての常識的解釈と言わざるを得ない。同様に藝術・宗教・歴史等々も、今日高度の分化主義が常識となつている我々としては、やゝもすると先入観にみちびかれて、古代人の間にも、こうした觀念が存在したかに考え易いのであるが、科学文化の上に立つている現代生活と、呪的世界観に支配されていた古代生活とを峻別することなしには、古代生活の実態にふれることはむづかしいであろう。

4. 本文の番号は誤入につき削除、

5. 恋愛の情は未開人の間には知られていなかつた所で、彼等は文明と附加的洗練との結果なる、その感情よりも以下にあつた。一般ギリシヤ人はその結婚習俗

が示している様に、固より多くの例外があつたには違ひないが、未だこの恋愛を知るに至らなかつた。ギリシヤ人の考へでは、女性の能力で最もすぐれてゐるのは、その肉体上の價値にすぎなかつた、それ故結婚は感情にもとづかないで、必要と義務ともとづいてゐた、(リユキス・モルガン著 荒畑寒村訳 古代社会 下 p. 299)

6. 倉野憲司 日本文学史 第三 第一章第七節参照

7. 風土記の古傳の大多数は、書紀又は昔からあつた旧辭から發展したものであり、然らざるものも多くは机上の製作であつて、地方の傳説ではない。(津田左右吉: 古事記及び日本書紀の新研究 p. 266)

8. 宇野田空: 上代人の民族信仰 (岩波講座 日本文学)

9. かれこゝに天照らす大御神見畏みて、天の石屋戸を閉てて刺し隠りましき。すなはち高天の原皆暗く、葦原の中つ國悉に闇かりき。これに困りて、常夜往く。こゝに万の神のおとがひ声は、狭蠲なす満ち、万の妖悉に発りき。(古事記上)

10. 風土記に於ける「荒ぶる神」の記事:

播磨記——賀古郡鴨波の里、神前郡には岡の里、肥前記——基肆(き)郡姫社の郷、國埼郡、佐嘉郡。  
伊勢記(逸文)——阿佐賀の荒ぶる神  
筑後記(逸文)——筑紫の國の國号  
駿河記(逸文)——こぬみの浜 てこの呼坂 その他

11. 折口信夫: 古代研究(民俗学篇 p. 990 石の成長する信仰、石の移動する信仰等参照)

12. 日本書紀卷三 神武天皇即位の條に、天皇の功業を称えて、始馭天下之天皇とあるのを波津久美(爾)